

〔研究ノート〕

マンダラ・コラージュ技法（1）

——時空における方形と円形——

黒木賢一

I はじめに

コラージュ (collage) とは coller (糊づけする) というフランス語で「糊による貼り付け」を意味しており、絵画の歴史においてはブラック (Braque, G., 1882-1963) とピカソ (Picasso, P., 1881-1973) らが始めたられた技法である言われている (入江, 1993)。

筆者が最初にコラージュに出会ったのは1970年後半のアメリカである。カリフォルニア州サンフランシスコ市の南にある College of Notre Dame (現在 Norte Dmae De Namur university) でアートセラピーのクラスを受講し、そのプログラムの中にコラージュの講義と実習があった。アメリカのコラージュ技法は、1970年初頭に精神科の作業療法の一環として実施されていた。日本では、コラージュ療法といえば京都文教大学の森谷寛之教授がこの療法を最初に手がけた研究者である。森谷 (2012) の著書の中に「先行研究についてーコラージュ療法以前」という項目がありコラージュ療法につて筆者を含め5名の研究者からの情報を得た内容について記述している。筆者に関しては「黒木賢一はアメリカでアートセラピーを受けた。コラージュはアートセラピーの中の一つとしてやっていた。しかし、アメリカではコラージュを専門にしている人はいない。向こう側の論文にだせば注目を浴びるだろう (1991年ごろ) と語った」と記述されている。また、森谷の疑問はこれらの人たちが何故それを日本に紹介しなかったのだろうか。そして結論づける。「結局のところ、コラージュがそれほど利用価値がある方法という認識を持つにいたらなかったからであろう。コラージュを知っているということと、その価値を見抜くということはまったく別であることが分かる」と (森谷, 2012)。コラージュ療法を積極的に関わらなかったのは、筆者を含む当時の若い5名の研究者たちはそれぞれの研究テーマが異なっていたからであろう。森谷の熱心な研究の結果、日本におけるコラージュ療法は発展を見せ、コラージュ療法を行うアートセラピストたちを育て、今や臨床現場のみならず多くの分野に広がりを見せている。本稿では、大学の授業の「芸術療法実習」で行ったマンダラ・コラージュについてその方法を述べ、結果から導きだされた①コラージュ過程における時空の気づきについて、②円形 (マンダラ) と四角形の画用紙がもたらす心理的な意味について考察する。

Ⅱ 方 法

- (1) 対象者：大学生2回生と3回生19名（男子8名，女子12名（1名欠席）で実施。19名の被調査者に対して，AさんからSさん（女子11名），KさんからRさん（男子8名）をアルファベットで示した。
- (2) 実施の場所：大学内の教室（40名程度収容可能）を使用。
- (3) 実施期間：科目「芸術療法実習」の授業内で4週にわたって実施。所要時間は1授業90分，個人差がかなりあるがゆえに，ゆっくり制作する学生に合わせた。

(4) 実施方法：

- 1 学生1名につき1枚の四つ切り画用紙を配布した。1回目のテーマ「現在の私」四つ切りの画用紙，2回目のテーマでは「過去の私」或いは「未来の私」については各自に選らんだもらい，円を描いた四つ切りの画用紙，3回目はこのテーマは2回目で「過去の私」を選らんだ人は「未来の私」，「未来の私」を選らんだ人は「過去の私」のテーマで，円を描いた四つ切りの画用紙を配布して円形にハサミで切るように指示し，円形画用紙にして用いた。
- 2 各テーマにしたがって，写真を切り抜きいた後に，画用紙に貼るように指示した。
- 3 各テーマのコラージュの制作後，「振り返りシート」に制作したコラージュの内容について何でも気づいたことや感じたことを自由記述してもらった。
- 4 「現在の私」，「過去の私」或いは「未来の私」の制作後，仕上げた順番に毎回各自に一人つき3分～5分ぐらいの簡単なインタビューを行った。

(5) 使用した用具

四つ切りの画用紙，はさみ，ステック糊，雑誌は各自2冊程度持参することを告知した。持参しない学生のためにい実施者が複数冊を準備した。男女別に机をセットアップし，学生間の雑誌の貸し借りを自由にした。

Ⅲ 結 果

女子2名（GとJ）男子2名（LとP）の4事例のコラージュの作品と振り返りシートに記述された内容を引用する。個人を特定できることに関しては記述表現などに手を加えた。

2番目の制作時に「過去の私」或いは「未来の私」の選択については，10名の女子のうち8名が過去の私，2名が未来の私，8名の男子の内3名が過去の私，5名が未来の私を選んだ。

事例1

（図1．L-1，現在）全体的に野球のことに食べ物に関するものが多い。所々に自分の欲しい物が散りばめられている。野球に関する写真が中央に寄っている。野球に対する思

事例 1

（図1）L-1，現在



（図2）L-2，未来



（図3）L-3，過去



いが強いために野球の写真が多いと思う。左下の乱闘の写真は「何か殴りたくなるような」ことがあると思う。時計は欲しいという気持ちと、「時は無限ではない」ことを表している。自分の欲しい物や気分がよく表れている。自分の思いが強いものが中心に集っているのかもしれない。

(図2 L-2, 未来) 将来こういった大人になりたい, こういったものを着て外を歩きたいという思いが強いかもしれない。お金が手に入れば, ブランド物を買ひ, かっこよくなりたいたいという願望。おしゃれになりたい。コラージュの外側は自分の身につけるものを多く貼った。野球の写真はこれからも野球を続けたいという願望。第2回目は「未来の自分」を選んだ理由は, 未来の方が自分の欲望やなりたいたいもの欲しいものがすぐに想像できるので選らんだ。円の中に貼らなければならないので, 配置を考えねばならなかった。テーマに沿って選ぶのが少し難しかった。

(図3 L-3, 過去) 野球をしていたので, それに関する写真を切って貼った。ヒーロー番組が好きでよく見ていたときの写真や電車が好きだったのでそれらを貼った。またよく食べていたスイーツを貼った。昔自分がしていたことや好きだったものが多い。3つの画用紙すべてに野球の写真が貼られている。円になると円を意識して貼るようになったが, 上下が分からなくなった。

事例2

(図4. N-1, 現在)

写真は欲しい物や行きたい場所など自分の欲求に関するものが多かった。文字を表すものがやや多い。右上の部分は, 携帯電話に向かって何かを叫んでいるような表現になった。ところどころに今流行している言葉や人物, 「スギちゃん」や「今でしょ!」のように流行のものを貼ったが, 流行が終わると, 現在ではなく, 過去になってしまうのではないかと思った。その一方で, スーツを着ている人の写真も貼っており, これは自身の就職活動を意識したものだ。就職は現在というより未来のことである。「もう一度ゴールドシップ」という文字を貼ったのは強い馬がレースで負けてしまったからだ。

(図5. N-2, 過去)

テーマは自分が今まで好きだったもの(今でも好きなものもある)。食べ物が割合的に多い。動物やキャラクターも多い。左に行くほど小さいころに好きだったもので, 右に行くほど, 最近好きなものである。バナナとカレーと熊が2つずつあり, 馬に関わるものが3つある。第2回目は「過去の自分」を選んだ理由は単純に時系列で考え, 過去から未来へと続く方が自然であると思った。また, 過去すなわち幼少期は自分が好きだったものでまとめおり, 複雑な感情はなく, 単純で好き嫌いの感情しかなかった。昔から食に関すること(作るのも食べるのも)が好きだったことを思い出した。作っている時は気づかなかっ

事例 2

（図4）N-1，現在



（図5）N-2，過去



（図6）N-3，未来



だが、左に向いているものは左側へ、右に向いているものは右側へ配置していた。このことから、円の中心ではなく円の外側へ向かっているのだと思った。また中心に大きな写真を貼ったのは、何かしらの安定感や安心感を感じるためだと思った。

(図6 N-3, 未来)

これから必要になりそうな物や自分がしたことなど、「これから…」という言葉キーワードにして制作した。真ん中にはこれから重要な役目であるパソコンを貼った。「スーツ」, 「梅田のビル」, 「高級時計」のように社会人として今後必要となる或いは関連するものを貼った。また、アメリカ(自由の女神), 寿司, 大きなタコ焼きのように、これから食べたいものや行きたい場所も貼った。自動車については、運転の機会がなく技術が落ちているのではないかとという不安と共に、運転の練習をしなければという葛藤があると思う。過去(図5 N-2), 現在(図4 N-1), 未来(図6 N-3)のコラージュで共通するのは、風景の写真を貼っているのは様々な場所へ行きたいという無意識を意味しているのかもしれない。円形画用紙に貼りつけることで上下左右を意識することなく、物が回っている(循環している)形になった。しかし、中心には最も重要なもの、を貼りつけるという考えは1回目も2回目も同じだった。つまり、私にとって、最も重要なのは中心部分であり、それはポジティブに捉えるなら軸のぶれない人間であり、ネガティブに捉えるなら、頑固な人間だと思った。

事例3

(図7 J-1 現在)

食べ物やファッションは斜めに、風景はまっすぐに貼ってある。食べるのが好きで、ケーキ屋でアルバイトしているので、他の店のスイーツを見ると気になる。よく考えて見ると、中学生ぐらいまで生クリームが苦手だったことを思い出した。ネイルをしたいが爪が弱くてできないこと、ケーキと傘が好きなこと、また旅行して食べ歩きたい。海外の写真を貼っているが海外旅行にはあまり興味がない。現在のコラージュでは、「今の私」というより、「今私がやりたいこと」を貼っていることに「今」気づいた。おしゃれをして食べたり風景を見たりというのんびりした生活を望んでいるのかと思った。コラージュは絵を描いたりするより簡単かなと思ったが、以外とどのように貼ろうかと難しかった。

(図8. J-2 過去)

過去のコラージュをしたとき、私は毎日何気なく過ごしてきたので、ほとんど記憶になかった。しかしコラージュをしている間に、あのとき、こういうことしたと少しずつ思い出すことができた。第2回目は「過去の自分」を選んだ理由は未来が浮かんでこなかったもので、過去から作っていった。最初に画用紙いっぱい貼るより、今回円の中に貼るという作業がすごく難しかった。一回目(現在)は重ねて貼ることをしていなかったが、今回は多少は重ねて貼ってみた。

事例 3

（図7）J-1，現在



（図8）J-2，過去



（図9）J 3



(図9. J-3, 未来)

未来のコラージュでは、未来の私が全く想像出来ずとても難しかった。いつか就職すると思うので、スーツの写真、将来もテニスが続けていきたいのでラケットの写真、自分だけの部屋がほしいのでベッドやカーテンの写真を思うままに貼った。現在と未来は無意識的だと思うが、過去のコラージュに関しては意識的に制作した気がする。

事例4

(図9 G-1 現在)

ネコが貼ってある。一般的に、ネコというのは、「自由気まま」といわれる。貼った時は、何も考えず、単に「ネコが好きだから」「可愛いから」貼ったのだが、後から見てみると、今の私が「自由気まま」ということを表しているのかと思う。靴をたくさん貼ったのは靴が好きだから。しかし、これは、もっと外に出て、いろんなことをしたいという心の表れか、または、何か一歩踏み出したいことがあるのかもしれない。右上には、ソファや自然を貼った。これは、もっといろんなことをしたいと思う反面、心は少し疲れていて、実は休みたいと思っているのかもしれない。全体的には、まとまっていないような印象を受ける。これは、今悩んでいることがあり、それを表しているのかと思う。絵を書くのもコラージュも共通している点はやっている時は何も考えなくてもいいので、終わると、なぜかすっきりすることだと思った。

(図10G-2 過去)

この作品を見たとき、「強め」なイメージがした。これは、私は小中学生のころ、人が好きじゃなくて、「自分はひとり」だと思っていたところがある。それが表現されているように思う。とがっていたのだらうと思う。第2回目は「過去の自分」を選んだ理由については未来よりも過去の方がイメージしやすいからだ。左右上下を決めたくなくて、丸く貼った。丸の中の制限されることによって、貼りやすかった。前回の制限の無い中（四つ切りの画用紙）で貼るより、時間がかからなかった。

(図11G-3 未来)

時計とカバンだけで、埋めてみた。時計がたくさんあることは、時間に追われるということなのか。カラフルにしようと思っても、選ぶのは地味な色。未来は、丸く貼っているし、選ぶものも大人らしくなって、私自身の性格が丸くなることを表しているのかもしれない。未来のコラージュは、手当たり次第貼っているわけじゃなく、貼り方も落ち着いている。これは、未来は、時間を気にして生活しなければならないが、「休みたい」ということもなく、バランスの良い充実した生活を表しているのではないかと思う。一番自由でできたのは円形画用紙でのコラージュだった。

事例 4

（図10） G-1



（図11） G-2



（図12） G-3



IV 考 察

(1) コラージュ作成過程における「時空」からの気づき

今回のコラージュ作成は集団で行っているが個人療法的な要素が強い。過去・現在・未来の3枚を仕上げるのに90分授業を4回連続しておこない、ゆっくり制作する学生に合わせた。1枚を完成すると、各学生とともにその作品を眺めながら、約3～5分間程のフィードバックを行ったことはすでに述べた。学生が感じたり、気づいたりする視点と臨床心理士として診ている筆者との視点が異なる。短いインタビューの中で、P(男子)は「先生と話している」と素直に今の自分を受け入れることができた。この作業の中で先生と話すプロセスが最も重要だと思う。自分と向かい合うというのは日常の中では難しいが、コラージュを通してみると、ゆったりと向かい合えた」と語った。

時間に関しはギリシャ神話に出てくる「クロノス」と「カイロス」という概念を用いてよく説明される。クロノスとは過去か未来に流れる物理的な時間であり直線的な私たちの日常的な時間を表している。カイロスとはクロノスの時間の流れに垂直に現れる非日常の異なる時間の領域のことである。また、空間の概念として、私たちが身近に知覚する物理的な狭義の意味としての「スペース」、広義な意味としての「ユニバース」或いは「コスモス」という概念がある。黒木(2013)によれば、「スペースが物理的に均質化され日常的空間を表すのに対して、他方のコスモスは<中心>をとって構造化され、意味によって文節化され有機的な空間として表象される。中心が重視さえる限り、やはり円環的構造がコスモスにはふさわしい」という。

この4事例に関して作品を中心に検討すると共に、他の被調査者の気づきを含めて分析をおこない、コラージュの心理臨床的な意味を考える。

事例1(図1～図3, L1～L3)では、「過去は、昔自分がしていたことや好きだったこと多い。現在では、今の自分が望んでいることや欲しいもの、今の気持ちや気分を表したものが多く貼られている。未来は、将来こういった大人になりたい、このような服を着たいという強い思いがある。過去・現在・未来の3つすべてに野球の写真が貼られており、大人になっても野球を続けたい」と述べている。事例1のように、3つのコラージュに同じテーマの写真の切片を貼ったのが他に2名(Mは野球, Qはテニス)おり、スポーツによって支えられてきたことが伺える。過去では、野球、ヒーロー、電車、食べ物の写真を貼っている。現在では野球と食べ物の写真、未来はブランド品を身につけた自分を表現している。事例1のLのように過去の私に関して、「～だった」という過去の出来事に関する表現をし、「未来の私」に関して、これから「～したい」、「～によろめたい」という願望や理想として記述していた人たち(B, C, E, F, I, L, N, Q)が半数近くいた。過去への振り返りと共に未来への期待が伺える。

事例2(図4～図6, N1～N3)も事例1と同じく、過去に関して自分が好きだった幼少時の食べ物、動物、キャラクターで過去の自分を表している。未来に関しては、「これから」というテーマで社会人になり必要なことやしたいことを述べている。

現在のコラージュの制作過程が二週間に渡ったことで現在がすでに過去になるという、時間の流れを感じ取っている。また3つのコラージュに共通している風景の写真を無意識的に貼ったことに関しても気づきが起こっている。現在即過去という時間の流れに関して、O（男子）は、「振り返りシートに書いてる瞬間でさえ、もう過去の人だなと思い、狭かった過去が広がった」と述べている。

事例3（図7～図9，J1～J3）では、「過去のコラージュをしている間に、あのとき、こうだったと少し思い出すことができた」という。過去の自分に投影した写真を切り取り、画用紙に貼っていくプロセスで、今・ここでの時空から自らの過去の時空に入っていくことを可能にするのがコラージュ技法なのであろう。現在では「今の私」というより、「今私がやりたいこと」を貼っていることに「今・ここ」で気づいたという。「おしゃれをしたり、食べたり、風景を見たりというのんびりした生活を望んで居るのかと思う」と語っている。未来のコラージュでは未来の私が全く想像出来ず、とても難しかったことは今後の課題なのかもしれない。

事例4（図10～図12）では、過去のコラージュでは「強めな女性」が円の中心に鎮座している。「とがっている自分」を表現し、過去の孤独であった時期の物語を振り返っている。現在では、切り抜いた写真から自己投影し、連想を働かせ、自己を分析している。猫好きで可愛いからと選らんだ猫の写真から自由気ままな自分、靴からは外にでて色々なことをしたいのか、何か一步踏み出したいのかと。また、ソファから疲れていて実は休みたいのかと、自問自答をしている。そして、現在の悩みをほのめかす発言がある。時空の流れに関して、過去のとがってる自分の表現から、現在では、その雰囲気も少しは残っているが、少し淡い感じも出てきた。未来は、丸く貼っているし、選ぶものも大人らしくなって、私自身の性格が丸くなることを表しているのかもしれないと連想している。事例4のように、B（女子）は「過去は一番いろいろなものが混じっており、現在は一番色がおだやかであり、未来はなにか系統が決まっている気がする」と述べている。またP（男子）は「過去は寂しく、空虚な感じ、現在はカオスに満ちている。そのような中でも未来は安定しており、しっかりと自分の理想の世界が描かれているのは意思のあらわれなのか」と、自らの過去を振り返り、現在の現実を眺め、未来を描くことを考えさせることがコラージュ技法なのだろう。

（2）方形と円形の画用紙がもたらす心理的な意味

コラージュに関してはピカソから始まるとすでに述べた。入江（1993）によれば、ピカソの最初のコラージュ作品「藤椅子のある静物」（図13）はコラージュの歴史上もっとも重要なものとして次のように述べている。

「楕円形のカンヴァスの下の部分には、藤椅子の柄が印刷されたオイルクロスを貼りつけてある。まわりにコップ、ナイフ、ホタテ貝を油彩で配している。新聞（journal）の三文字“J O U”のような文字は、後々にもしばしば用いられているが、従来の絵画表現にはなかった特徴である。（文略）周囲の麻縄はカンヴァスの上の静物を支給する「盆」

の枠としての役割があるとも言われている。この枠の意義には、箱庭療法や絵画療法の枠付け法などに共通するものであり興味深い。もちろん、治療空間という心理療法全般に関連するテーマでもある」(入江, 1993)。

(図13) ピカソ『籐椅子のある静物』



『コラージュ療法入門』より

ピカソがマンダラについて知っていたとは思えない。コラージュで楕円形を用い、その中に表現したリアリティを麻縄で枠付けをしたこの作品は、当時の彼の精神状態を表していたのかもしれない。入江は麻縄を枠付けとして捉え、また治療空間と関連すると心理臨床的に解釈している。

心理療法の領域で東洋宗教の狭義の「曼荼羅」を広義の「マンダラ」として読み取り、世界にマンダラの名を広げたのはユングの功績であった。鶴見・瀬富(2005)によれば、曼荼羅とは「梵語の mandala の音訳。本質 (manda) を得る (la) の意で、最高のさとりを得ることであり、その場所を意味する。また、諸仏菩薩のさとりの世界を一定の方式で網羅した図である」という。また正木(2007)はマンダラとはもともと「円」・「輪」を示す言葉であったと説明している。ユング(1961/1972)は、フロイトと決別したあと、内的な不確実感に襲われ方向喪失の状態が起こり、全くの宙ぶらりんで立脚点を持ってない状態であった。また毎朝ノートに小さい円の絵、マンダラを描いていたという。そのような状態の中で、「私が描いたマンダラは、日毎に新しく私に示された自己の状態についての暗号であった」として、マンダラを描き始めてからマンダラを「自己」の表現と認識し、自らの中心すなわち個性化の道へ向かうと理解したのである。またユング(1980)は「マンダラ図形ははっきりした目的を持っている。それは「原始の溝」つまり中心をめぐる魔術的な溝であって、最奥の人格の本質という神殿あるいはテメノス(ギリシアの聖域)を描くことなのである」と語っている。

マンダラ・コラージュに関して、青木(2009)はカパチオーネ(1990/1993)によって提案されたという円形台紙を用いたコラージュを集団個人療法で実施し、円形のマンダ台紙はコラージュ表現を通して、より具体的な洞察を可能にすると述べている。

本稿において、四つ切りの画用紙を用いた、四角形台紙、円を描いた四角形台紙、円に

切り抜いた円形台紙にコラージュを試み、その違いを考えたい。本稿で用いる「マンダラ」とは「円」を意味しており、ユングのいう「人格の本質という神殿」であるセルフと理解している。円を描いた台紙、円形台紙にコラージュしたものをマンダラ・コラージュと呼んでいる。次に、①画用紙の形態の違い②円の中に貼る意味③中心と周縁について考察する。

①画用紙の形態の違い

私たちは幼い頃から絵を描くときに八つ切りや四つ切りの画用紙を用いていたがゆえに四角形の画用紙に親和性がある。Jは「円の中に貼るという作業が四角形に貼るよりも難しかった（図8，J）」と語っている。また円を描いた四つ切りの画用紙に貼る場合、「枠の中に収めようという圧迫感がある」とFは感じたという。その反面、「枠があり円の中に制限されることによって、貼りやすかった（G，D）」。「四角形画用紙の制限の無い中で貼るより、円形の方が時間がかからなかった（G）」。「四角形は重ねて貼らなかったが、円形は重ねて貼ってみた（図9，J）」。「円形台紙にはあまりたくさん貼ろうという気が起きなかった（F）」。「画用紙の形態による影響が個人で異なることが伺える。慣れ親しんだ四つ切りの画用紙と新たな円形画用紙に対して彼・彼女たちの無意識が反応していることは感性の違いなのかもしれない。

②円の中に貼る時の気づき

円を描いた画用紙の場合、「円の中に入れなければならないので、配置を考えなければならなかった（図2，L）」。「円の中に貼るのは四角い中に貼るよりも上下左右が生まれにくい感じだった（H，L）」。「四角形はバランスなどをあまり気にせず作業したが、円形は自分なりにとてもバランスを意識して貼った（O，E）」或いは「左右均等に貼ってある（O）」など配置やバランスを意識していることが特徴の一つであると言える。円形画用紙の場合、「円を意識して貼るようになった（図3，L）」、「枠がない感じで自由さがある（D）」、「一番自由にできたのは円形画用紙（G）」などの特徴が伺える。円という枠の中にコラージュすることは、上下左右が無くなることで配置を意識しバランスを取ることで、自由さを表現できることを意味している。

③中心と周縁

四角形の画用紙にコラージュした「現在の私」に関して、事例3（図7）と事例4（図10）には中心に置かれた写真はなく、事例1（図1）と事例2（図4）には中心に写真が貼られている。これは四角形よりも円形の方が中心を意識しやすいのであろう。事例1と事例2は男性でありすべての作品の中心に大切な写真を貼っている。事例1では図1，図2，図3の中心に投影した「自分」を表現している。また、事例2には、「中心に大きな写真を貼ったのは、何かしらの安定感や安心感を感じるためなのかなと思った」（図5N）。「円形画用紙に貼りつけることで上下左右を意識することなく、物が回っている（循環している）形になった」（図6N）。中心には最も重要なものを貼りつけるという考えは

3枚(図4, 図5, 図6)とも同じである。また、Q(男子)は「中心に自転車や靴を貼ったのは、ほとんど毎日自転車を使っていたので中心に貼った」と重要なものとして自転車をとらえている。このように中心のもつ意味は大きい。事例3では、「私の過去の流れを意識して貼ったら、真ん中が開いてしまった(図8, J)」という。インタビューの中で、Jは転勤族で生活の場が変わった順序で円の周辺にその時々を表わす写真を貼ったと語ってくれた。事例2の「ものが回っている(循環している)形」とも通じている。また「真ん中が開いてしまった」という中心が空白になっていることの意味は何なのだろうか。事例4の図11は過去の私がテーマであり、中心に強めなイメージの女性が描かれ、Who am I(私は誰)と問いかけている。過去の自分の物語から、自らの中心に向かって問いかけているように思える。図12は時計と靴のみで構成されており「マンダラ」そのものである。その構造は中心から外に向かってエネルギーが流れている。時計は時間(クロノスとカイロス)の時を刻み、靴は大切なものを運ぶ器(空間=スペースとユニバース)につながっているであろう。

(V) お わ り に

大学の授業「芸術療法実習」という科目を履修した学生AさんからRさんの協力を得て出来上がったのがこの論文である。彼・彼女らのもつ潜在性、可能性、創造性に敬服し感謝している。この実習授業では以前からコラージュは行っていた。マンダラ描画法を研究してきた筆者が、ふと、マンダラ・コラージュをしてみよと思ったのである。普段用いている四つ切りの画用紙、マンダラ描画法で用いている円を描いた画用紙、円形画用紙、アートセラピストが用いる三種類を試みることで、円(マンダラ)の持つ力が浮かび上がるのではと考えたのである。今回の研究を通して見えてきたことは、「円のもつ力」と「コラージュの力」を再認識できたことは大きく、次の研究のヴィジョンに向かいたいと考えている。

(文献)

- 青木知子(2009): マンダラ・コラージュ—自己理解の可能性—。文京学院大学健康医療技術学部紀要。第2巻。PP 31~40.
- Capaxxhione, Lucia (1990): The Picurre of Health. Hay House, Inc, Santa Monka, Ca.
- 長谷川寿美訳(1993): アートヒーリング。たま出版。
- 入江 茂(1993): 美術史におけるコラージュ 森谷寛之, 杉浦, 入江茂, 山中康裕(編) コラージュ療法入門, 創元社
- Jung, C. G., (1961): Memories, Dreams, Reflections. Pantheon Bokks, New York. 河合隼雄・藤縄昭・出井淑子(訳)(1972): ユング自伝1—思いで, 夢, 思想—。みすず書房。
- Jung, C. G., Wilhelm, R., 湯浅泰雄, 定方照夫(訳)(1980): 黄金の華の秘密。人文書院。
- 黒木幹夫(2013): 四国遍路の人体科学的考察。旅とスピリチュアリティ。人体科学会23回大会抄録集。PP 24~26。人体科学会。
- 森谷寛之(2012): コラージュ療法実践の手びき 金剛出版
- 正木 晃(2007): マンダラとは何か。日本放送出版会。
- 鶴見和子・瀬富本宏(2005): マンダラの思想。藤原書店。
- 山中康裕・入江茂・杉浦京子・森谷寛之(編)(1993): コラージュ療法入門。創元社。